

大学生の国語力に関する実態の分析と考察（2）  
—日本漢字能力検定結果の分析データに基づく漢字能力の実態とその考察—

野々村 憲

Analysis and Consideration of The Actual Situation Concerning University Student's  
National Language Power(2)

—The Actual Situation of Chinese Character Ability Based on Analysis Data of Japanese Chinese  
Character Ability Certificate Examination—

Ken Nonomura

I am guiding the Japanese Chinese character ability authorization in the Hiroshima Bunka Gakuen University and the Hiroshima Bunka Gakuen Junior College as part of the qualification acquisition guidance. In the result of this authorization the striking feature is seen in student's Chinese character ability. The analysis and the consideration of this authorization result are paragraphs 2 of this thinking.

I lecture 「Fundamental Seminar I・II」 in the Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department Child Studies. One of the purposes of this lecture is to improve student's grounding. To improve student's national language power by this lecture, the Chinese character ability authorization was executed. In paragraph 3, the outline of the guidance was brought together.

キーワード

漢字能力 Chinese character ability, 基礎的国語力 Fundamental national language power, 基礎ゼミナール Fundamental Seminar

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University  
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

## 1. 緒言

筆者は2008年、広島文化短期大学紀要第41号において、「大学生の国語力に関する実態の分析と考察—講義における検定試験運用の現状報告を通して—」を論じた。

その論考で報告できなかった内容を、実践報告という形で論じたのが、本論考である。

筆者は、広島文化学園大学及び広島文化学園短期大学における資格取得指導において、日本漢字能力検定の運用に携わっている。この検定は、本学学生の基礎学力として必要とされる国語力を高めること、さらには、キャリア形成の一環として、資格取得を推進するといった目的で実施している。

日本漢字能力検定の運用に携わり、その結果を分析してみると、近年の学生の漢字能力において、顕著な特徴が見られるということがわかった。この検

定結果の分析と考察を試みたのが、本論考の第2節である。

広島文化学園大学学芸学部子ども学科では、平成22年度より講義『基礎ゼミナールI・II』が開講された。本講義を担当する筆者は、講義において、学生のリメディアル教育としての基礎学力の向上をめざす取り組みを行っており、その取り組みの一環として、日本漢字能力検定を運用した国語指導に取り組んだ。この検定を運用した国語指導に取り組んだ実態の報告と、そこから見えてくる今後の教育課題について論じたのが、本論考の第3節である。

## 2. 検定試験の運用状況・試験結果の分析と考察

(1) 日本漢字能力検定

①概要

本検定は財団法人日本漢字能力検定協会により

1975年から開始され、1992年から文部省（現文部科学省）の認定（認定制度廃止により、現在は後援）の資格となった。略称は「漢検」「漢字検定」。本論考では、以下、この略称を使用する。

近年、漢検を単位認定や入学優遇に使用する高等学校・短期大学・大学は増加の傾向にある。さらには企業が漢検の級所持者を優遇するといった傾向や、漢字の問題を扱うテレビ番組の増加等といった要因により、2000年以降、漢検の受検者数は急増している。

受検会場は、一般の公開会場とあらかじめ会場申請をし、検定会場としての許可を受けた準会場があり、本学では準会場校として漢検を実施している。

## ②検定級とレベル

漢検の検定級は1級から10級までとなっている。それぞれの級のレベルと対象漢字数は以下のとおりである。

表1 各級のレベルと対象漢字数

級	レベル	対象漢字数
1級	大学・一般程度	約6,000字
準1級	大学・一般程度	約3,000字
2級	高校卒業・大学・一般程度	1,945字 他に人名用漢字
準2級	高校在学程度	1,945字
3級	中学校卒業程度	1,608字
4級	中学校在学程度	1,322字
5級	小学校6年生 修了程度	1,006字
6級	小学校5年生 修了程度	825字
7級	小学校4年生 修了程度	640字
8級	小学校3年生 修了程度	440字
9級	小学校2年生 修了程度	240字
10級	小学校1年生 修了程度	80字

（日本漢字能力検定協会指導者用漢検ガイドより）

## （2）本学での漢字検定の運用状況

本学では、「広島文化学園大学・短期大学」という名称で準会場の申請をし、準会場校としての認可を受け、準会場実施規程に則り、年3～4回の検定を実施している。本学で実施する漢検の受検級は、学生の国語能力の実態を考慮し、その級を、2級・準2級・3級・4級と限定している。（1級・準1級は公開会場のみ受検となるため、準会場の本学では実施ができない）

現在、筆者は大学及び短期大学において、以下のような国語関連の講義を担当している。

○広島文化学園大学学芸学部

「日本語表現Ⅰ」（子ども学科・音楽学科）

「国語」（子ども学科）

○広島文化学園短期大学

「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」（コミュニティ生活学科）

「国語表現」（食物栄養学科）

「日本語学」（保育学科）

これらの講義の中で、大学及び短期大学の学生には、国語学習への動機づけとして、漢検への受検を積極的に勧めている。

## （3）漢字検定結果の分析と考察

### ①受検級の認定基準及び試験問題の構成

2級・準2級・3級・4級の受検級は、いずれも200点満点での採点である。

合格基準は、2級が155点以上（80%程度）、準2級・3級・4級は140点以上（70%程度）となっている。

本学で実施している漢検の受検級の、それぞれの級別問題構成は以下のとおりである。

表2 2級の問題構成

大問題 番号	小問題 番号	出題 領域	配点	問題 形式
(一)	1～30	読み	30点	記述
(二)	1～10	部首	10点	記述
(三)	1～10	熟語の構成	20点	択一
(四)1	1～10	四字熟語	20点	記述
(四)2	1～5	四字熟語（意味）	10点	択一
(五)	1～10	対義語・類義語	20点	記述
(六)	1～10	同音同訓異字	20点	記述
(七)	1～5	誤字訂正	10点	記述
(八)	1～5	漢字送り仮名	10点	記述
(九)	1～25	書き取り	50点	記述

表3 準2級の問題構成

大問題 番号	小問題 番号	出題 領域	配点	問題 形式
(一)	1～30	読み	30点	記述
(二)	1～10	部首	10点	記述
(三)	1～15	同音同訓異字	30点	択一
(四)	1～10	熟語の構成	20点	択一
(五)	1～5	漢字識別	10点	択一
(六)	1～10	対義語・類義語	20点	記述
(七)	1～5	漢字送り仮名	10点	記述
(八)	1～10	四字熟語	20点	記述
(九)	1～5	誤字訂正	10点	記述

(十)	1～20	書き取り	40点	記述
-----	------	------	-----	----

表4 3級・4級の問題構成

大問題番号	小問題番号	出題領域	配点	問題形式
(一)	1～30	読み	30点	記述
(二)	1～15	同音同訓異字	30点	択一
(三)	1～5	漢字識別	10点	択一
(四)	1～10	熟語の構成	20点	択一
(五)	1～10	部首	10点	択一
(六)	1～10	対義語・類義語	20点	記述
(七)	1～5	漢字送り仮名	10点	記述
(八)	1～10	四字熟語	20点	記述
(九)	1～5	誤字訂正	10点	記述
(十)	1～20	書き取り	40点	記述

②漢字検定の結果とその分析及び考察

平成22年度は、第1回ならびに第2回の漢検を実施しており、試験結果は以下のとおりである。

表5 第1回（6月20日実施）結果

	2級	準2級	3級
受検者数	3	5	6
合格者数	1	2	3

表6 第2回（8月20日実施）結果

	2級	準2級	3級	4級
受検者数	3	8	10	4
合格者数	1	2	4	0

本論考では、平成22年度第1回ならびに第2回の漢検結果データを集計し、その分析及び考察を試みた。

平成22年度第1回・第2回受検者全体の平均正答率ならびに、各級別の平均正答率は以下のとおりである。

表7 平均正答率

	全体	2級	準2級	3級	4級
正答率	65%	74%	63%	68%	47%

全体平均正答率65%。この正答率に対し、準2級・3級は全体平均並みだが、2級の正答率は全体平均を上回っており、4級は全体平均をかなり下回っている。

これは、2級および4級の受検者の、学習への取り組みの差が結果としてデータに表れているのではないかと推測される。

さらに、領域別平均正答率（全体ならびに級別）を集計したものが以下（表8）である。

表8 領域別平均正答率

領域	全体正答率	2級正答率	準2級正答率	3級正答率	4級正答率
読み	81%	83%	81%	80%	79%
部首	62%	73%	51%	72%	50%
熟語構成	59%	72%	50%	64%	42%
四字熟語	49%	63%	42%	52%	28%
対義語類義語	46%	62%	46%	47%	20%
同音・同訓異義語	78%	67%	80%	83%	67%
誤字訂正	57%	87%	54%	55%	30%
漢字送り仮名	52%	70%	60%	51%	5%
書き取り	58%	73%	56%	60%	26%

全体平均正答率65%に対し、領域において平均を上回っているのは「読み」「同音・同訓異義語」のみである。それ以外の領域は、すべて全体平均正答率を下回っており、特に、正答率の低い領域は「誤字訂正」「漢字送り仮名」「四字熟語」「対義語・類義語」であった。

この結果から、当大学の学生においては、漢字の意味を理解し、文中で語を適切に使用するといった能力や、動詞の活用などの基本的な文法の理解において、低い傾向にあることがわかる。

本論考における調査結果の傾向は、2005年に実施された全国的な漢字能力調査（※注1）においても、同様の傾向を示している。

（注1）全国的な漢字能力調査

財産法人日本漢字能力検定協会が2005年に実施した全国規模の漢字能力実態調査。本協会では、日本人の漢字能力を客観的な指標で把握するという目的で、中学生から大学生までを対象とした漢字能力調査を実施した。

### 3. 漢検を運用した国語指導の取り組みと課題

#### (1) 講義『基礎ゼミナール』

##### ①『基礎ゼミナール』概要

1年間を通して、行われる『基礎ゼミナール』（前期は『基礎ゼミナールⅠ』後期は『基礎ゼミナールⅡ』を開講している）の講義目的は、大学入学後の初年次にあたり、建学の精神・教育理念を十分に理解し、本学科で学ぶ目標を明確にした上で、大学での学び方を身につけ、大学生として講義を理解するための基礎学力を高めることである。

これらの目的を達成するために、『基礎ゼミナールⅠ』は基礎編、『基礎ゼミナールⅡ』は、応用編という位置づけである。

講義は、セミナー&チューター制（※注2）のもとに、教員と学生とが信頼を築きながら、少人数制による演習形式で行っている。

#### (注2) セミナー&チューター制

本学の教育方針を具現化するための教育指導体制のことである。学生生活や修学上の様々な問題の相談相手となるのがチューターである。チューターは、学生とつながりの深いゼミナール教員が担当し、ゼミナールの講義を中心として、指導を展開している。

#### ②『基礎ゼミナール』の学習目標ならびに授業計画

##### 講義『基礎ゼミナールⅠ』

###### 【学習目標】

- (1) 基礎的なルールやマナーを身につけること。
- (2) 学生生活のスケジュール管理ができること。
- (3) 大学での基礎的な学習方法や技術を習得すること。

###### 【授業計画】

授業計画は以下の表のとおりである。

表9 『基礎ゼミナールⅠ』授業計画

回	大項目	講義内容等
1	オリエンテーション(1)	履修計画, 4年間の学習計画等
2	オリエンテーション(2)	履修指導, オリエンテーションキャンプ概要
3	スタディ・スキルズ(1)	「生徒」と「学生」の学び方の違い
4	スタディ・スキルズ(2)	タイム・マネジメント:年間目標設定
5	スタディ・スキルズ(3)	大学で何をどう学ぶのか
6	聴く・読む(1)	ノート・テイキングのスキル
7	聴く・読む(2)	ノート・テイキングの実際

8	聴く・読む(3)	リーディングの基本
9	聴く・読む(4)	リーディングの応用①要点・要約
10	聴く・読む(5)	リーディングの応用②新聞のコラム
11	聴く・読む(6)	リーディングの応用③感想・意見
12	聴く・読む(7)	課題図書・読書感想文
13	調査・整理(1)	図書館での情報収集
14	調査・整理(2)	インターネットでの情報収集
15	調査・整理(3)	情報の整理

##### 講義『基礎ゼミナールⅡ』

###### 【学習目標】

- (1) 文章の書き方の基本を身につけること。
- (2) パソコンによるライティング・スキルを身につけること。
- (3) レポート作成スキルを身につけること。
- (4) プレゼンテーション・スキルを身につけること。

###### 【授業計画】

授業計画は以下の表のとおりである。

表10 『基礎ゼミナールⅡ』授業計画

回	大項目	講義内容等
1	オリエンテーション(1)	基礎ゼミナールⅡ概要説明
2	オリエンテーション(2)	履修計画、履修指導
3	まとめる・書く(1)	わかりやすさとはどういうことか
4	まとめる・書く(2)	わかりやすい文
5	まとめる・書く(3)	わかりやすい文章
6	まとめる・書く(4)	わかりやすい表現方法
7	まとめる・書く(5)	レポートとは何か
8	まとめる・書く(6)	レポート作成の手順
9	まとめる・書く(7)	論文の作法
10	まとめる・書く(8)	ワープロソフトの基本スキル
11	まとめる・書く(9)	表計算ソフトの基本スキル
12	まとめる・書く(10)	推敲, ページレイアウト, 印刷
13	表現・伝える(1)	プレゼンテーションの基本スキル①
14	表現・伝える(2)	プレゼンテーションの基本スキル②
15	表現・伝える(3)	わかりやすいプレゼンテーション

#### (2) 『基礎ゼミナール』における国語指導の実際

基礎ゼミナールの学習目標である「大学生として講義を理解するための基礎学力を高めること」を実践するための取り組みの一つとして、漢検を運用した国語指導を実践した。

基礎学力の中核をなすものは国語力であり、その



国語力を向上させることによって、他の学力も向上していくと考えたからである。

国語力向上のために、まずは学生に馴染みの深い漢検への挑戦から始めるのが取り組みやすいのではないかと考えた。漢検は、能力のレベルが明確であり、その勉強方法も確立している。また、取り組んだ結果も明確に出るため、段階をふまえた学習や指導を展開していくことができると考えたわけである。

そこで、講義では、漢検への全員受検という目標を掲げ、各自の能力に応じて受検級を設定し、自学自習するよう指導した。また、ゼミナール時にも問題演習や過去問題に積極的に取り組んだ。

受検に向けて、各学生の受検級を設定するために、各自が漢字能力の実態を把握する必要がある。そこで、基礎ゼミナールにおいては、その漢字能力を把握するための模擬試験を実施した。

模擬試験は、漢字能力の標準レベルを漢検3級(中学校卒業程度1608字)に設定し、その標準レベルに対して、現在自分がどの程度の能力であるのかを把握させることとした。

以下、基礎ゼミナール時に実施した漢検3級模擬試験の試験結果である。模擬試験には、日本漢字能力検定協会の実施した漢字検定の過去問題3級を使用した。

表11 基礎ゼミナール漢検模擬試験結果

NO	総合得点	漢字の読み・理解					漢字の書き取り					入試種別
		一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	
1	188	28	26	10	18	10	20	8	18	10	40	一般
2	163	27	26	4	18	8	18	8	12	10	32	推薦
3	156	29	30	10	8	7	12	6	14	8	32	AO
4	154	27	26	8	18	9	18	4	8	8	28	一般
5	150	27	30	10	6	7	16	4	18	10	22	推薦
6	147	27	26	8	12	6	10	8	14	8	28	推薦
7	135	30	28	8	14	9	16	2	8	6	14	AO
8	125	26	24	8	18	7	10	2	8	6	16	推薦
9	120	24	22	4	14	8	16	0	2	6	24	推薦
10	110	24	26	2	4	8	18	2	6	6	14	AO
11	103	21	26	8	8	8	14	0	8	8	2	AO
12	86	18	20	4	16	6	0	0	2	6	14	AO
13	72	13	22	0	12	7	0	0	6	2	10	AO
14	69	22	24	0	2	9	4	0	6	2	0	AO
15	66	20	16	4	4	6	10	0	2	0	4	AO
16	58	16	24	6	6	4	2	0	0	0	0	AO
17	55	16	20	2	2	9	0	0	0	0	6	推薦
18	46	7	16	4	6	7	0	0	0	0	6	推薦

表は、総合得点の高い順番から並べた（ゼミナール学生18名）。表の入試種別とは、その学生が、本

学にとどの種別の入試で入学したのかを示したものである。

表11からは、漢字能力において、個人差の開きが大きいことがわかる。

模擬試験（200点満点）において、総合得点が120点（60%）以上の学生が半数（NO1～NO9）に対して、総合得点が120点未満の学生が半数（NO10～NO18）である。総合得点差の開きを見てもわかるとおり、明らかに個人差の開きは大きく、能力の高い学生と低い学生が二極化していることがわかる。

すなわち、NO1のように、高等学校で、すでに漢検2級に合格しており、現在は準1級の合格をめざして勉強に取り組んでいるという能力の高い学生がいる一方、NO16～NO18のように、総合得点200点に対し、60点（30%）未満の学生もいるのである。

漢字能力において二極化した学生の、本学への入学における入試種別を見ても、明らかな傾向が見られる。すなわち、総合得点120点（60%）以上の学生（NO1～No9）の入試種別は推薦入試、一般入試での入学者が大半であり、総合得点120点（60%）未満の学生（NO10～NO18）の入試種別はAO入試での入学者が大半であるということである。このデータからは、学生の基礎学力と入試種別との間に相関関係があることが推測できる。

各問題項目別の得点においては、次のような傾向が見られる。

各問題項目は、一～五が「漢字の読み・理解」問題（合計100点）、六～十が「漢字の書き取り」問題（合計100点）である。表の得点の全体的な傾向を見てもわかるとおり、「漢字の読み・理解」問題の得点が高いのに対して、「漢字の書き取り」問題の得点が低いという傾向が見られる。

（3）今後の課題

ゼミナールにおける漢検の運用を通じた国語指導について述べた。この指導を通して、実感したことは、基礎学力の個人差の開きが大きいということである。

この傾向は、漢字能力のみにとどまらず、国語、英語、数学等の教科の基礎学力にも同様のことがいえるということがわかった。このような学生の現状から、学生の基礎学力を高めるための指導体制・指導法が早急に必要であると考えられる。

①入学前教育の必要性

近年、日本の大学では、受験に合格した学生の入学前教育が必要であるという認識が定着してきつつある。本大学においても、数年前より入学前教育を実施しており、本学の教育方針や教育内容のガイダンス等を行っている。

今後、このような入学前教育の内容をさらに充実

させ、大学入学後の勉学への取り組み方の指導、さらには基礎学力を補うための講座、といった内容を盛り込んでいく必要があると考えられる。

#### ②リメディアル教育

最近、日本の大学生の基礎学力が低下しているということが言われており、また、それを裏付けるデータも発表されるようになった。各大学では、学生の基礎学力を補うためのリメディアル教育の重要性を指摘しており、大学によっては、高等学校へ戻り、基礎学力を学び直すという措置を行っている大学さえ出てきた。

本大学のカリキュラムにおいては、基礎学力を補うための科目が明確に配置されていない。今後、カリキュラムを、リメディアル教育という観点から見直し、教育体制をさらに充実させていく必要があると考えられる。

#### おわりに

日本漢字能力検定結果の結果分析データに基づく漢字能力の実態とその考察を通して、大学生の国語力に関する実態の分析と考察を試みた。

今後もさらに、多面的な実態調査を重ね、大学生の国語力の実態把握を進めていきたいと考えている。さらには、その実態調査から見えてくる課題をもとにして、今後の国語指導のあり方を模索していきたいと考えている。

#### 参考文献

- 1) 日本漢字能力検定協会 :2005年「漢字能力調査」結果の概要, 2005, 8